

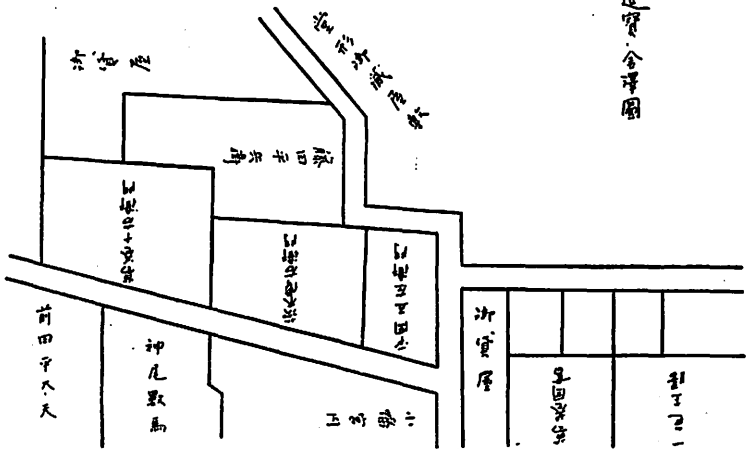
有之。地はさよみ布にて仕立候も有之、又毛織の結構に見事成るもあり。又疊具足二領有之。大阪にて着用の具足は、常の鎧にて成程手輕の拵へ也。綱紀御壯年の頃、具足の着やうは何と仕たる宜敷候哉と尋ね給ふ處、何と申す儀も無御座候。唯ひたもの着つけ、物馴れ申すほど能き儀は無御座候と御請申上げけるに、尤なる事と御意有之旨承り傳へたり。又腰當なしと申す儀尋ねけるに、腰當なしに大小等を指し候旨にて、所持の腰當無之候へば如何様にからみ候哉、其の傳も無之、自分にも色々腰當致所持候へ共用ひ不申候。只上帯の外腰がらみの帶有之、大小をかみたりといへりとぞ。道隨容貌堀部養叔に似申す由。但し小男にて瘦せ、養叔には聊も似ず。小男には不相應に長き刀を好み指したりといへり。又松雲公夜話録に云ふ。中黑道隨は毎度御前被召出古戦之物語をも被聞召候。或時申上候。大阪にて傍輩之内手負有之引退き候時、脊中に負ひけるに、手負を楯に致し候様に相見可申と存じ、前に抱き候而立退き候旨申上候。又陣中にて刀留の仕様色々有之、如何様にいたし宜候哉と道隨に御尋之處、私儀大阪

の時分博勞ヶ淵の要害を乗申候。刀脇差おとし指にいたし不申候ては、邪魔に成り、手拭などにてぐらつき不申様にくり付宜敷候。惣て何もかも色々武具は不案内故に候。畢竟何も入不申由御請仕候。尤成る事に候と御物語被遊候とあり。

○藤田平兵衛番邸
右藤田平兵衛邸地、延寶原圖には葛巻・茨木・平岡三氏の姓名は載せられたと、藤田氏の邸地は姓名記載せず。明地となし、附紙に藤田平兵衛と載せたり。されば延寶製圖の後、此の地を居邸に賜はりたるにや。元祿六年の土帳に、藤田平兵衛古堂形前とあり。享保九年土帳にも、二千石藤田求馬古堂形前と載せたり。さて夫れより代々居住の處、寶曆九年四月の火災に此の地邊悉く延焼し、火災後火除地に命ぜられ、同年八月小立野出羽二番町入口永原左京揚屋敷をば、藤田氏の邸地に賜はり、廢藩の際まで爰に居住す。

○藤田氏邸宅奇談
咄隨筆に云ふ。藤田内藏允宅は堂形前にあり。座鋪に極めて枕がへしする一間あり。或夜五人云ひ合はせ、有明をとぼ

延寶・金澤園



し置き、寝て居て互に物語する内に枕を返す。それ逆さまになるはといふ内に、頭は跡先になる。五人ながら此の如し。或時家來何某泊番にて蚊屋の内に寝にけり。唐紙障子をさらりくと明けて来る者あり、見れば二歳許のうつくしき女の紅粉色をましたるが、色よき装束にて蚊屋の外に踞りて、右の手の食指と母指とにて蚊屋の寸尺を取りて歸るに、元のごとく唐紙障子をさらりくと立てゝぞ行きける。又或時内藏允江戸へ發足の前夜、草履取宿より歸りけるに、門前近くなる時、是もうつくしき女の貌白く齒黒きが立向ひ、にこくと笑ひ懸りける程に、其のまゝ氣を取り失ひけるを、人々聞付け伴ひ歸りけるが、煩ひ付きて死にける。餘りの事に、或年内藏允江戸より歸に、高岡より大鹿といふ名犬を連れ來られしが、大いなる絡を一つ取りける。又餌指をも頼みて釣り取られし故にや。今は怪しき事なしとぞ。中村太兵衛の物語也。

○藤田内藏允安勝傳

鳩巢文集に載せたる正徳四年室直清が藤田氏家譜序に云ふ。余仕賀家于金澤城。與藤田安勝相識久矣。是歲安勝